

エズラ記1章1-4節 「主のことばの実現」

1A 預言の確かさ

1B エレミヤの「七十年」

2B 七十年の土地の安息

3B イザヤによる予告

2A 解放者

1B バビロンの終焉

2B 捕囚からの解放

3B 神殿の再建

本文

明けまして、おめでとうございます。私たちは、歴代誌第二の学びが終わり、バビロン捕囚後の歴史をこれから学ぶこととなります。エズラ記、ネヘミヤ記、エステル記がそれです。ユダヤ人にとっても、新しい幕開けとなる時代に入ります。エズラ記1章 1-4 節が今朝の本文です。

1 ペルシヤの王クロスの第一年に、エレミヤにより告げられた主のことばを実現するために、主はペルシヤの王クロスの霊を奮い立たせたので、王は王国中におふれを出し、文書にして言った。2 「ペルシヤの王クロスは言う。『天の神、主は、地のすべての王国を私に賜わった。この方はユダにあるエルサレムに、ご自分のために宮を建てることを私にゆだねられた。3 あなたがた、すべて主の民に属する者はだれでも、その神がその者とともにおられるように。その者はユダにあるエルサレムに上り、イスラエルの神、主の宮を建てるようにせよ。この方はエルサレムにおられる神である。4 残る者はみな、その者を援助するようにせよ。どこに寄留しているにしても、その所から、その土地の人々が、エルサレムにある神の宮のために進んでささげるささげ物のほか、銀、金、財貨、家畜をもって援助せよ。』」

時は、紀元前 536 年です。バビロンがユダの民を捕え移しましたが、そのバビロンを紀元前 539 年、ペルシヤ人クロスが倒しました。メディア人ダリヨスによる暫定政権が 2,3 年続いた後、正式にクロスが、ペルシヤ帝国の初代王となります。

1A 預言の確かさ

1B エレミヤの「七十年」

年末年始において、私たちが特に注目したいのは、「神のことばの確かさ」です。先週は、イエス様が世の終わりについて、「この天地は滅びます。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。(マルコ 13:31)」と言われたところを読みました。神の言葉は真実であり必ずその通りになる、ということです。

いま話したペルシヤ帝国の始まりについては、日本の世界史の教科書にも出てくる歴史的出来事です。けれども、この歴史的出来事をそれが起こるはるか前から、神は預言者を通して告げておられた、というのが大事な点です。「エレミヤにより告げられた主のことばを実現するために」とあります。エレミヤが、このように預言しました。「見よ、わたしは北のすべての種族を呼び寄せる。…主の御告げ。…すなわち、わたしのしもべバビロンの王ネブカデレザルを呼び寄せて、この国と、その住民と、その回りのすべての国々とを攻めさせ、これを聖絶して、恐怖とし、あざけりとし、永遠の廢墟とする。わたしは彼らの楽しみの声と喜びの声、花婿の声と花嫁の声、ひき臼の音と、ともし火の光を消し去る。この国は全部、廢墟となって荒れ果て、これらの国々はバビロンの王に七十年仕える。七十年の終わりに、わたしはバビロンの王とその民、…主の御告げ。…またカルデヤ人の地を、彼らの咎のゆえに罰し、これを永遠に荒れ果てた地とする。(エレミヤ書 25:9-12)」

ネブカデネザルがエルサレムを攻めたのは三回あります。紀元前 605 年、597 年、そして 586 年です。第一回バビロン捕囚であり、605 年からちょうど七十年後に、クロス王がユダヤ人を解放して、エルサレムに帰還させて、神殿を建てるようにという発令を出しました。この他、エレミヤ書 29 章 10-11 節にも、同じ内容の預言があります。「まことに、主はこう仰せられる。「バビロンに七十年の満ちるころ、わたしはあなたがたを顧み、あなたがたにわたしの幸いな約束を果たして、あなたがたをこの所に帰らせる。わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。…主の御告げ。…それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。」有名な、災いではなく、将来と希望の与える計画という約束は、ユダヤ人がバビロンからエルサレムに戻ってくる約束の中で語られたものです。

このように、主が語られたことは確実にその通りになるということであり、私たちは神の言葉に信頼を寄せることができる、ということです。

私たちは絶えず、将来に生きていくために、必要な情報を集めながら生きています。どの言葉を信じればよいか、取捨選択しながら生きています。日本の多くの人が、実に半分以上の人が大手新聞の情報や NHK は信頼性があり、大きな事件が起こるたびに、そうした情報源を、水を飲むように自分の心に取り入れています。あるいは、自己啓発の本もあることでしょう。テレビで著名な人々の言葉を信じているかもしれません。または、占いも流行っています。こうした情報や言葉を食べなければ、私たちは安心して暮らすことができません。

けれども問題は、その情報の信憑性であります。もし、それが嘘だったらどうするのでしょうか？私たちは、何かを信じる時に、誰かを信じる時に、「いわしの頭も信心から」という諺にあるように、その信憑性を度外視して信じること自体が大事なのだ、と思います。けれども、それが事実でなければどうするのでしょうか？あらゆる批判や検証を受けても、それに耐えうる言葉でなければいけません。

それで神は、聖書全体を通して、「わたしが前もって語ることによって、わたしが神であることを知りなさい。」ということをお教えられます。だれもが予測できないほど前から、ある出来事について告げることによって、確かに神ご自身の言葉は信頼に値する真実なものであることを証明するので、神の言葉を預かる預言者については、神は非常に厳格な基準を設けておられます。「あなたが心の中で、『私たちは、主が言われたのでないことばを、どうして見分けることができようか。』と言うような場合は、預言者が主の名によって語っても、そのことが起こらず、実現しないなら、それは主が語られたことばではない。その預言者が不遜にもそれを語ったのである。彼を恐れてはならない。(申命 18:21-22)」語った言葉が実現しないなら、その人は偽預言者であり、彼は死刑であるということを教えています(20 節)。ですから、聖書に出てくる言葉は、厳しい審査にかけて、果たして本当かどうかを試すことができます。

そして、私たちはエレミヤが、バビロンがエルサレムを滅ぼす直前から、七十年預言を語っていたことを知っています。そしてクロス王によってそのことが実現しました。神は、このことによって、ご自身が信頼に足る言葉を持っており、その言葉は真理なのだということを証明してくださっているのです。ですから、聖書預言を調べることはとても大切です。

ところでエレミヤの預言に信頼し、祈り始めた人がいました。バビロンに住んでいたダニエルです。彼は十代の少年の時に、紀元前 605 年の第一回バビロン捕囚においてバビロンに捕え移されました。そして、紀元前 539 年にエレミヤの書いた文書を読んでいました。そこに、エルサレムの荒廃が終わるまでの期間が七十年であることを悟ったのです。それで彼は祈りました。断食をして灰をかぶって、祈りました。自分の民が罪を犯してきたことを悔い改め、神の憐れみによって荒廃しているエルサレムに目を留めてほしいと願いました。その祈り求めの 2-3 年後、確かに主はクロス王によってダニエルの祈りを聞いてくださいました(ダニエル 9 章参照)。

ですから、私たちは神の預言にしたがって祈っていくことが必要です。神の預言とは神の御心にあります。例えば私がなぜ、日本人の霊の救いだけでなく、他の国々の人々の救いも願っているのでしょうか？この前、マルコ 13 章 10 節で読みました。「福音がまずあらゆる民族に宣べ伝えられなければいけません。」というイエス様の言葉があるからです。たとえ自分が誰一人も、日本人以外の人に伝道したことがなかったとしても、他の言語を話せなかったとしても、特に外国に興味がなかったとしても、主がこのように預言されたのですから、自分の理解に頼らず、主の言葉に信頼して、あらゆる民族に福音が宣べ伝えられるように祈るのです。

2B 七十年の土地の安息

さらに、七十年についての預言の確かさを眺めてみましょう。歴代誌第二の最後の学びで、私たちは、七十年の捕囚が、イスラエルの土地に安息を与えるという目的もあったことを読みました。「これは、エレミヤにより告げられた主のことばが成就して、この地が安息を取り戻すためであった。この荒れ果てた時代を通じて、この地は七十年が満ちるまで安息を得た。(36:21)」主は、イスラ

エルに与えられた土地は七年毎に、一年間休ませなければいけないことを命じられました(レビ 25:2-5)。一年、耕作をしないのですから、次の年に食べていけるのか不安です。けれども、主はその前の年に三年間の収穫を必ず与えると約束してくださいました(20-22 節)。

ところが、イスラエルに王国が始まったのが、紀元前 1095 年です。サウルが王となりました。それからバビロン第一次捕囚の 605 年まで、一切、イスラエルは土地に安息を与えませんでした。1095 から 605 を引けば、490 年です。七十回分の安息年をイスラエル人は破りました。そこで、彼らが土地を休ませないので、彼らをその土地から七十年間引き抜くことによって、ご自分の言葉を成就させようとしたのです。紀元前 1445 年頃に、モーセがこのように語った通りです。「その地が荒れ果て、あなたがたが敵の国にいる間、そのとき、その地は休み、その安息の年を取り返す。地が荒れ果てている間中、地は、あなたがたがその住まいに住んでいたとき、安息の年に休まなかったその休みを取る。(レビ記 26:34-35)」

3B イザヤによる予告

クロス王について、さらに確かな預言を眺めてみましょう。イザヤ書 44 章を開いてください。26 節から読みます。「わたしは、わたしのしもべのことばを成就させ、わたしの使者たちの計画を成し遂げさせる。エルサレムに向かっては、『人が住むようになる。』と言い、ユダの町々に向かっては、『町々は再建され、その廃墟はわたしが復興させる。』と言う。淵に向かっては、『干上がれ。わたしはおまえの川々をからす。』と言う。わたしはクロスに向かっては、『わたしの牧者、わたしの望む事をみな成し遂げる。』と言う。エルサレムに向かっては、『再建される。神殿は、その基が据えられる。』と言う。」(イザヤ 44:26-28)イザヤが預言したのは、ヒゼキヤの時代、紀元前 700 年前後でしょう。そしてクロス王が生まれたのが紀元前 600 年頃と言われています。クロスが生まれるだいたい百年前に、クロスという男によって、イスラエルの子らがエルサレムに戻ることを、そしてエルサレムに神殿を再建させることを預言しました。

さらに、「わたしはおまえの川々をからす」とイザヤは預言しています。これは、バビロンの町を流れるユーフラテス川のことです。クロスがバビロンの町を攻略したのは、ユーフラテス川を上流で、他のところに流れるように迂回させて、それから水かさが増したところで水門の下をくぐって、そしてバビロンの町に入ったのです。

続けてイザヤ書 45 章を読みましょう。「主は、油そそがれた者クロスに、こう仰せられた。「わたしは彼の右手を握り、彼の前に諸国を下らせ、王たちの腰の帯を解き、彼の前にとびらを開いて、その門を閉じさせないようにする。わたしはあなたの前に進んで、険しい地を平らにし、青銅のとびらを打ち砕き、鉄のかんぬきをへし折る。わたしは秘められている財宝と、ひそかな所の隠された宝をあなたに与える。それは、わたしが主であり、あなたの名を呼ぶ者、イスラエルの神であることをあなたが知るためだ。(45:1-3)」このことは正確に成就しました。ダニエル書 5 章、またヘロドトスの記した歴史書で確認することができます。水門の下をくぐったメディア・ペルシヤ連合軍は、

さらなる障害がありました。その川の両側には大きな壁があるのです。けれども、町の真ん中に橋があって、そこは頑丈な青銅の門があり、そこを通らなければ城内に入ることができません。

ところが、その時にバビロンの王ベルシャツアルは、大宴会を催していました。酒をたくさん飲んでいました。その時に、突然、塗り壁に人の指が出てきて、物を書いたのです。彼の腰の関節がゆるみ、膝ががくがくに震えました。ここに、「王たちの腰の帯を解き」とあるとおりです。そして、宴会をしていたので、青銅の門を護衛している者たちも泥酔していました。それで、難なく門を通り、宮廷内に入り、ベルシャツアルを殺したのです。ここに、「青銅のとびらを打ち砕き、鉄のかんぬきをへし折る」とある通りです。いかがですか、ここまで詳細な出来事を、クロスの生まれる百年前に告げることができたのです。

そこで主は言われるのです。「わたしが主であり、あなたの名を呼ぶ者、イスラエルの神である。」これはクロスに語りかけておられる主の言葉です。続けて読むと、「わたしが主である。ほかにはいない。わたしのほかに神はいない。あなたはわたしを知らないが、わたしはあなたに力を帯びさせる。(5 節)」と言われます。

いかがでしょうか、私たちは心の中に数多くの神々を持っています。ちょうど、リスクを回避するために投資先を分散させるポートフォリオのように、自分の信頼する神についても、ひとりの神だけに頼るのではなく、いくつかの神々に拠り頼んでおこうとしています。聖書の神について、イエス・キリストについて、この方も受け入れておくが、もしかしたら失敗する可能性もあるので、他のものにも拠り頼んでおこうとするのです。けれども主は、そのことを退けられます。「わたしが主である。ほかにはいない。わたしのほかに神はいない。」と言われます。そして、イエス・キリストだけが唯一の主なのです。

2A 解放者

そして、主はクロスについて、驚くべき呼び名を使われています。イザヤ書 44 章 28 節をもう一度、見てください。「わたしはクロスに向かっては、『わたしの牧者、わたしの望む事をみな成し遂げる。』と言う。」異教徒であり、イスラエルの神についての知識のないクロスに対して、「わたしの牧者」とまで言われています。そして 45 章 1 節を見てください、「主は、油注がれた者クロスに」と言われています。「油注がれた者」のヘブル語は「メシヤ」であり、すなわちキリストです。クロスが、なんと牧者と呼ばれ、キリストと呼ばれているのです。

それは、クロスが行ったことが、後にイエス・キリストが行われることを予め示していたからです。クロスが行ったのは次の三つです。「バビロンの国を終わらせること」「捕囚の民を解放して、エルサレムに帰還させること」そして「神殿を再建させること」であります。

1B バビロンの終焉

歴史上のバビロンは、紀元前 539 年に確かにペルシヤによって倒れました。けれども、バビロンは聖書では、この歴史上の国以上の大きな意味を持っています。エデンの園に蛇が現れた時以来の、悪魔と悪霊のいるところ、そしてこの世そのものを示しています。イエス様が、天から地上に戻ってこられる預言が黙示録 19 章にあります。17-18 章に地上の王たちと不品行を行っている大淫婦の姿としてバビロンが出てきます。この都が、イエス様が戻ってこられるのに際して、滅ぼされるのです。

ですから、バビロンをクロスが終えたことは、キリストがこの世を滅ぼされることを予め示しています。使徒ヨハネがこう言いました。「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行なう者は、いつまでもながらえます。(1ヨハネ 2:15-17)」私たちは、世の人が求めている物から、どれだけ離れているでしょうか？それらのものは滅びるのです。ただ、神のみこころを行なう者がいつまでもながらえます。

2B 捕囚からの解放

そしてクロス王は、ユダヤ人をバビロンの捕囚状態から解放し、エルサレムに帰還させました。この出来事を基にして、イザヤはメシヤについてこのように預言しました。「神である主の霊が、わたしの上にある。主はわたしに油をそそぎ、貧しい者に良い知らせを伝え、心の傷ついた者をいやすために、わたしを遣わされた。捕われ人には解放を、囚人には釈放を告げ、主の恵みの年と、われわれの神の復讐の日を告げ、すべての悲しむ者を慰め、・・(61:1-2)」心の貧しい者にイエス様は良い知らせを伝えられました。自分には何も無い、どうしようもない、自分には何も無い、乞食みたいな存在だ、という人にイエス様は「幸いだ、天の国はあなたのものである。」と言われました。そして、心の傷ついた人を直して下さいます。

そして捕らわれた人々を解放して下さいます。福音書を読むと、悪霊につかれた人々から悪霊を追い出してくださいました。悪霊だけでなく、イエス様は十字架に付けられたことによって、罪と死から解放してくださいました。「そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放して下さるためでした。(ヘブル 2:14-15)」私たちはもはや、罪の縄目の中になくてもいいです。自分の根本は罪です。罪の性質から免れないと思っています。いいえ、キリストが流された血潮によって、その罪を根こそぎ取り除いてくださいました。罪がなくなったということではありません、けれども罪を犯さなくてもよい自由が与えられました。御霊に導かれ、神に自分を従わせることによって、罪から離れることができるのです。

3B 神殿の再建

そしてクロスは神殿を建てるように命じました。イエス様は、ご自身が再臨されて、エゼキエル書やゼカリヤ書に、神の神殿を建て直し、そこにご自分の座を設けられることが約束されています。

つまり、キリストが王となっている神の国の中に招き入れてくださる、ということです。「また、光の中にある、聖徒の相続分にあずかる資格を私たちに与えてくださった父なる神に、喜びをもって感謝をささげることができますように。神は、私たちを暗やみの压制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。(コロサイ 1:12-13)」私たちは、愛する御子のご支配の中に移されました。神の国の財産を受け継ぐようにされました。私たちはただ、罪が赦されただけではないのです。この天地のすべてを造られ、その万物を御子キリストにゆだねられ、キリストにあってこれらのものをすべて私たちに与えるといわれるのです。神と交わりをすることによって、神のものを私たちが共有するようにしてくださいました。

なんという豊かなものとされたことでしょうか！これらの約束を私たちは信じていますか？世と世の欲は滅び去ります。キリストの死、また復活によって罪の支配から解放されました。そして、神の御国の中に入ることが許されています。これらは真実なことばなのです。真実なことばであることを示すために、何十年も、何百年も前に、起こることを予め告げて、確かに神の言葉は真実であることを証明してくださっているのです。

私たちは、自分にとって都合の良い言葉を心の奥底で取捨選択していないでしょうか？イエス様はユダヤ人宗教指導者に対して、こう言われました。「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。(ヨハネ 5:39-40)」彼らは学ぶのです。けれども、イエスのところに来ようとしません。聖書を学んでも、その書かれてあることにしたがってイエス様のところに行っていない、ということがないでしょうか？そして、イエス様のところに来ないことを、逆に他の活動で補おうとしていないでしょうか？クリスチャンらしく、聖書をたくさん読み、祈る姿も見せ、献金もし、伝道しているようにみせても、肝心のイエスのところに来るということをしなければ、イエスにある命に預かることはできません。

神の言葉を真理として受け入れ、そしてその中で生きましょう。御言葉の中に生きるという、神の召しに応答しましょう。